滋賀県立総合病院広報誌

FACE

第8号
2022.10

県民の最後の砦として

患者さんご自身の治癒力や回復力を最大限にする取り組みが、経営改善には欠かせません。

自己紹介

病院運営のプロとして

平成29年当時は、メガバンクからの要請で同じ滋賀県内の医療機関で事務長として経営改善を実施していました。前任地は、短期間にV字回復しましたので、次は神戸の病院に赴任する予定でしたが、他の公立病院と同様、赤字に苦しむ県立総合病院より支援要請がありました。公立病院での経験は無く、経営立て直しの自信があったわけではありませんが、同時に京都大学を退官し着任する一山総長を支えるようにとの関係者からの依頼も強く、事務局長を引き受けました。

そうして約5年がたち、今年度は年度当初から黒字の状況を維持しています。もちろん、病院長をはじめとする医師の先生方、院長補佐を筆頭とする看護師や多くの技術職員や委託も含めたスタッフの努力のたまものでもあります。ただ、事務局長として、病院職員が力を発揮できる環境を整えられたことが経営の基本であり、赤字経営と言われた時代から毎月黒字の病院へ変質できたことは、病院運営のプロとして一定の達成感があることは事実です。

［経歴］

村田 昌史（むらた まさふみ）

- 京都博愛会病院　医事課長
- 北野病院　事務次長
- 東大阪病院　事務長
- 京都岡本記念病院　事務長
- 草津総合病院　事務長
- 現)滋賀県立総合病院　事務局長